

徳成寺 寺ともかわら版 第124号 2017年4月

いつもありがとうございます。住職の大山です。

あらゆる人を味方に生きる。それが平和的な仏教徒の生き様です。

人々の中に敵味方を分かつのでなく、敵としか思えないような人から

さえも何かを学びとることができれば、分け隔てを越えられそうです。

2015年のパリ同時多発テロのあとに、目隠しをしたイスラム教徒の

男性が、「私はあなたたちを信じています。私の事も信じてくれるなら、

抱きしめて」というメッセージを掲げて、パリの広場に立ちました。このささやかな

試みに賛同した幾人ものパリ市民が、彼をハグしました。この光景に目頭が熱く

なるのをおぼえました。平和的な生き様の底に信ありという証明だと思います。

宗教や国家・民族の違いを超えて、信の力強さ・尊さを教えられた

気がします。信は力なり。

*子供おつとめ本を、ご希望の方はご一報下さい。

発行責任者
住職
大山健児
坊主
大山ひよみ



徳成寺・跡取り長男の東京奮闘記

どうも、長男です。非常に悲しい事ではありますが、祖父が亡くなりました。

この頃体調が悪そうな話は聞いていたので、あんまり長くはないだろうと覚悟をしていた矢先でした。通夜前日に帰省した私はスライドショーで映したり、棺の中に収める写真を選んでいた所、まだ小さい私達兄弟と祖父が微笑んでいる写真が出てきました。写真の中では私達も祖父も幸せそうでした。祖父のイメージはあの時のままで固まっていて、病院へお見舞いに行った際に、何をするのも辛そうな弱りきった姿、変わり果てた容貌を黙ってみているのはとても辛かったです。葬儀の際に「それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに」という文で始まる所謂、白骨の御文というものを読みました。人生というものはとても短く、儚いものでその日の暮らしの事だけを考えるとあっという間にお別れがやってきますと言うような内容です。この御文は非常に有名で私も何度も読んだのですが、ハッとさせられたのはこれが初めてです。日々に流されずに生きることの難しさを教えられたような気がしました。



在りし日の祖父